

八角巡礼——夢の領土

- 一、幻の八角堂
- 二、渾沌
- 三、物の怪
- 四、黄泉がえり
- 五、死に続ける
- 六、円環としての現在
- 七、八角形のパラドクス
- 八、巡礼エクササイズ

巡礼地

- 1、 八角九重塔
- 2、 蚕の社
- 3、 御土居
- 4、 小野篁・紫式部の墓
- 5、 ライフ・イン京都
- 6、 縁切り縁結び碑
- 7、 ねじりまんぼ
- 8、 蛇塚古墳

一、幻の八角堂

「八角」という言葉は、法隆寺夢殿の八角円堂から来ています。大工の神でもあった聖徳太子を供養するために建てられた建物です。太子がそこに籠り、よく夢を見たということから太子信仰の場所となりました。

太子が創建した六角堂では、夢と六角形のつながりが指摘され、六根（眼・耳・鼻・舌・身・意）から生じる六欲を捨て去り、角を丸くして円満になる意味があるようです。夢を見ている状態はこうした機能的な感覚器官を超えたところに生じるものです。

親鸞がこの六角堂で見た夢の中で聖徳太子のお告げを聴き、後に浄土真宗を開祖したように、夢や幻は現実を動かす動力となっています。また平安京に都が移動する際に、お堂が道路の中央に当たっていたため、当時の桓武天皇が場所の移動を祈願したところ、お堂が十五メートル北へ退いたという逸話が残されています。夢がこの現実を動かす動力ならば、それも不思議な話ではありません。

後に建てられた夢殿は八角堂です。「八」は日本神話では聖数とされ、例えばスサノオは「八雲立つ 出雲八重垣 妻籠に八重垣つくる その八重垣を」と述べた最初の和歌があり、また唯識の第八識「阿頼耶識（読み：あらいしき）」で八つの識（見識・耳識・鼻識・舌識・身識・意識・末那識（読み：げんしき・にしき・びしき・ぜっしき・しんしき・いしき・まなしき））に続く最深層があり、5つの感覚に意識と執着心（自我意識）を合わせ、さらにそこにもう一つ足した数が「八」になる。このように内発的な夢を見る欲動から意味付けることもあれば、中国の八方位陰陽説といった方角と関係づけた意味もあるようです。場所を限定しない夢と地理（領土）の関係が八角巡礼の関心です。いずれにせよ太子が夢を見た場所であったところに建てられたわけですから、ヴァーチャルな想像と建設との高次元の結節点（ノード）となっていました。

ここでは「八」という仮の数を巡礼スポットに、もう一つの冥界巡りを探訪してみましょ。情報網が張り巡らされた現代社会からすれば、夢は旧態依然としているかもしれませんが、例えばコロナ禍でいつもとは違う夢を見たという声が多くあったように、オンラインに比重を置いた社会から、再びリアルワールド（オフライン）の夢や神話世界にアクセスすることは、単なる概念的なアナロジー以上に意味のあることだと思います。感覚を超えた繋がりにオンラインがあると考える。異次元の巡礼地を結ぶことで、影の世界から地上を捉える「夢の領土」を浮かび上がらせてみます。

巡礼地 1

平安時代後期、この岡崎公園の地には八メートルもの高さのある「八角九重塔」（法勝寺境内）が建てられていました。何度かの火事で今は失われた幻の八角堂。ちょうど動物園の観覧車のある場所がその跡地です。

※図版キャプション：「八角九重塔」のCG復元図、復元考証：富島義幸、CG作成：竹川浩平

二、渾沌

莊子の「渾沌」という有名な説話があります。渾沌は、目鼻口耳の7つの穴を持たない、恐らくのっぺらぼうのような存在でしょう。感覚器官を持つ「儻」（読み：しゆく）と「忽」（読み：こつ）（これらは迅速を意味します）は渾沌に対して外から穴を開けられ、7つ目の穴を開けたところで渾沌は死んでしまいます。渾沌自身はあらかじめ感覚を持たないのですから、見ることも聞くこともできない。そもそも視覚・聴覚・嗅覚・味覚の前提さえなかったはずで、未分化な自然の状態を意味していました。そこに人間の都合で穴を開けたことが災いした。渾沌は、機能的な五感からは計り知れない感覚の持ち主であったと考えることもできます。「万物斉同」を唱えていた莊子は、現実世界の差別は虚妄であると考えましたが、渾沌からすれば世界には内部も外部もない。形で言うなら「無角形」といったところでしょうか。円ではなく点のような。

仏教や神道にも渾沌のような存在は登場します。「日本書紀」では混沌の中に大地が出現し、泥（読み：アシカビ）の中に生命が発現したと書かれています。こうした見えざる、聞こえざる渾沌の世界は、後の人々によってネガティブな意味合いで捉えられることが多いですが、神々の世界にはスサノオのように「荒ぶ（読み：すさぶ）」＝「遊ぶ（読み：あそぶ）」ことに比重を置いた神の存在もいたように、天地開闢の最中では壊すことと構築とが共存して世界が生成していきます。むしろそうした渾沌に対してどう社会的に関係を作れるのかは倫理的な問いになります。

巡礼地 2

平安時代以前からある木嶋神社の「蚕の社」には、鳥居が三角形に囲った三柱鳥居が知られています。通常はお堂の正面にある鳥居ですが、その鳥居が三角形をなして独立している。その結界は何の鳥居なのでしょう。何もない中央の点（宇宙）、その虚無の噴火口に思いを馳せることもできるでしょう。それは無角形の渾沌を彷彿としないでしょうか。鳥居のディメンジョンをそのように考えると、あの有名な伏見稻荷大社の連続した鳥居の見え方も変わってしまいそうです。

※図版キャプション：葛飾北斎画『北斎漫画』、『三柱鳥居』

三、物の怪

付喪神は、器物の神として知られています。もともと「九十九」と書いた文字で、寿命の長さを表していたものが、長持ちする器物に当てられて「付喪神」とされました。長く使われる物には魂が宿る。器物は自然の神と違い、作り物（レディメイド）の神であり、古い道具などに手足が生えた妖怪などが絵巻物に描かれています。いわば物の怪です。後に澁澤龍彦は、付喪神は鬼などの地獄の形而上学にはない現実の物へのフェティッシュがあると述べました。

※図版キャプション：江戸時代『付喪神記』

「文字」も古代では物のような威力を発揮していました。それまでは「ものあわれ」、無常が世界だったところからすれば、文字は残酷に残り続ける魔力を持ち、当時の人々は文字に魂を持った「字霊」（読み：じだま）を感じています。日本でも漢文が輸入され神仏習合を果たす際に、かな文字のような音声言語が前景化してきますが、中世末葉に登場する付喪神とは、物や文字の持つアウラが声の軽快さに移行していくことにより後退したことで現れた精霊です。

「千と千尋の神隠し」の中でも湯婆婆に名前（文字）を奪われることで、地上の名前を忘れて冥界で働くことが許されます。付喪神は冥界に帰るのではなく人間の日常の器物に棲みつく妖怪であり、物への恩恵を忘れたことによる物の怪の悲鳴です。この世にはそのような人間の意識の外に棲みつく影の世界が同居しているようです。

巡礼地3

安土桃山時代、豊臣秀吉は台形の土塁と堀からなる境界を作り、都市改造を行いました。角のある堤防、防塁が築かれることで、「洛中」と「洛外」の境界線が引かれます。人間による視覚的な内と外の差別化は、その土地の鞍馬や丹波の物の怪を怒らせたかもしれません。家の古道具を路地に捨てる「煤払い」は、付喪神の災難に合わないために行われるのだそうですが、それは人間に対する捨てられた家具や道具の復讐です。後の時代の近代化にともない私たちの住む京都はフラットになり、当時の広大な敷地は見えにくくなりましたが、「御土居」にはその台形のわかる起伏が今も残されています。

※図版キャプション：「史跡御土居の地図」、「御土居の断面模式図」

四、黄泉がえり

冥界の地下水脈を行き来していた小野篁という人物がいます。祖先に小野妹子がいる異色の才能を持つ家系にありました。篁は嵯峨天皇に批判的なことを述べたため、隠岐の島に流された反骨精神の持ち主であり、「野狂（読み：やきょう）」とも呼ばれましたが、詩才があり博識であったことから2ヶ月半で復帰することができました。例えば嵯峨天皇に「子子子子子子子子子子子子子子子」という言葉の読み方を質問された際に「ねこのこのねこ、ししのしのし」と読んだことは見事としか言いようがありません。当時は日本一の詩才を持つと町衆に評判でした。

そんな篁は、夜は冥界で閻魔大王の右腕として働き、昼は官僚をしています。人々の地獄行きを判定するための司法官を行い、「蘇り」（黄泉がえり）を決める伝説が知られています。冥界の入り口は六波羅の珍皇寺の井戸にあり、嵯峨の地の福正寺（現・薬師寺）に七つの出口の井戸があり、地下水脈は実在しています（なお現在は七つの井戸は埋められてしまったようです）。「七転び八起き」という言葉にもあるように、八回目で蘇ることを意図していたのでしょうか。「八」は「復活」の意味もあるのです。

※図版キャプション：江戸中期『扶桑皇統記図会』

聖徳太子が後の八角堂の夢殿に祀られたことも「黄泉がえり」と関係あるのでしょうか。八角形はどこか蘇りのアイコンのようにも思えるのです。

巡礼地4

たとえば篁と生前接点を持っていない紫式部は、「源氏物語」で男女の愛欲を描いて人々を惑わせた罪に問われた墮獄説（読み：だごくせつ）があり、後世の歌人によって篁に救済を祈願するための供養塔が建てられ、篁と式部の墓は隣り合わせになっています。おおよそ一〇〇年ほど遅れて生まれた式部と篁をつなぐ墓地はこんもりとした小山となっており、地下水脈は起伏をなしていません。篁の墓に対して式部の墓は大きく、むしろ篁を囲い込んでいるように見えます。

このような冥界のフィールドは、始まりも終わりもないかのような回帰的時制のもとにあります。単線的な時間軸を飛び越えたつながりを作ることができるのも、この回帰的な時制を元にした物語があるからです。この現実の「蘇り」は黄泉がえりの経路に喩えられますが、そのような神話的な説話のもとで起こりうる出来事であり、そこには後世の観客（歌人）による時空を超えて「読み替える」大胆な編集作業があるようにも取れるでしょう。こうして時代を超えて影響をもたらす「篁」は不老不死のアイコンのようでもあります。

五、死に続ける

篋の時代、一般的だった風葬から土葬への移行がありました。死体をそのまま放置することで腐敗して白骨化していくのを見届ける「九相図」には、篋の孫とも言われる小野小町の死体も描かれています。もがり（風葬）は、現在の通夜の起源とされています。肉体から魂が離れていくのを物質的に朽ちていく工程として捉えることは、死ぬ事を知覚し続ける他者によって生かし続けてもいるかのようです。九相図には、コマ送りに撮影されたマイブリッジの運動する身体の躍動感ではなく、死ぬことにも迫真さや躍動感があることに気づかされます。

※図版キャプション：『九相図巻』鎌倉時代、九州国立博物館蔵

地上から冥界への行き来をした篋はしかし、疫病を防ぐために衛生的な視点から捉えていました。これは閻魔大王の恐さにも言える事ですが、そこにある権力は決して暴力的というわけではなく、反面教師的な性格によるものではないでしょうか。地獄の恐ろしさを知っている、死との間を往復しているからこそ、そのような視点を持てたとも言えるでしょう。

物語や説話に触れていると、現実の死は生と明確に区切ることができず、神話世界と地続きであると感じます。感染症も目に見えないウイルスによる死との共存形態であり、人間は毎秒、死に続けてもいる。ただ目に見えないだけで、老化とは異なる屍体を生き続けてもいるわけです。

巡礼地 5

介護老人ホームの「ライフ・イン京都」は、プロダクト・デザイナーの若林広幸が設計した建築です。アジアの老人ホームを設計する人たちの見本にされるくらいに、世界的に評判が高いようです。足腰を鍛えるためにバリアをむしろ作るべきだと考えて設計されたというこの建物には、天井に逆さ階段があったり、エントランス正面には滝が流れ、老人ホームの先入観を払拭してくれます。バリアフリーが進んだ空間でリハビリして、バリアフルな屋外に出てもすぐに転倒してしまうでしょう。脆弱な身体を作るよりも、バリアを生かすことで逆説的な自在さを獲得することができるのです。それこそ蘇りや復活、回復にはそうした異質なねじれを通過した後の強さ（可塑性）を持っている。ライフ・イン京都の建物は、堂々と京都の風景に向き合っています。遠くから見ると、どこかピラミッドの遺跡のようです。

六、円環としての現在

かつての日本人には幽霊や物の怪などの存在が非常に身近であったことは各種説話からわかります。あの世が最も身近になるお盆の時期に六道（地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天人）巡りが毎年行われているように、この地上の単線的な時間とは異なる「精霊の時」があるようです。

日本人は修養や信仰などの身体的行為を通して、あの世とこの世を経験的に近づけていたと考えられるのではないのでしょうか。生と死を改めて切り結ぶことで、死の道を生き続けてもいた。先ほど述べた篁の冥界巡りは、往路を「死の六道」、復路を「生の六道」と呼び、同じ道でも方向によって意味が違います。

巡礼地 6

安井金比羅の「縁切り縁結び碑」は、江戸時代の断ち（読み：たち）の祈願のならわしから来ており、ここでも石にあいた穴を這って通過することで誰かとの縁を切り、再度、同じ穴を戻ることにより誰かと縁を結ぶという方向性があります。同じ場所でありながらも、前と後ろでは風景が異なるように、往路と復路の思想がある。このため多くの若者たちが日本各地からやってきて、怨念のエネルギーが文字通り渦巻いています。

このように行為を通してねじれを経験することで、地上にいながら冥界を通過するような時空の歪みが、「聖地」と呼ばれるようになるのではないのでしょうか。

巡礼地 7

地上と冥界がはっきりと分かれずに曖昧な状態を残した異次元の場所は、宗教施設以外にも日常の中に実在するはず。「ねじりまんぼ」（粟田口隧道）と呼ばれる明治に造られたトンネルは、レンガ造りであるにもかかわらず、らせん状にねじれていく錯覚を起こす造りをしており、まさにそこをくぐり抜けると冥界への入り口のようなのです。もともと土地の名である「蹴上」にも名残があるように、江戸時代に粟田口刑場のあった縁起の悪い場所でした。しかし、琵琶湖疏水が開通した明治期に、船を運ぶインクラインが上を通り、鉄道や用水の重さに耐える強度を保つ「ねじり」を取り入れたトンネルが作られた。このトンネルには入り口に「雄観奇想」、反対側に「陽気発処（読み：ようきはつするところ）」と書かれています。

たとえば浦島太郎の説話では、龍宮城に行き帰ってくると三百年も経ってしまいます。古代の説話のもつ回帰的時制は、始まりと終わりのある個人の時間の固定観念では測ることのできない時間です。「今昔物語」の「今は昔」という言葉にも、「昔」が過去の出来事として語られるというよりも、「今ここ」の現在が急激に大昔へと瞬間移動させられ、突き放される感覚がないのでしょうか。生から死へ一直線に進むのではなく、その途中に円があり、円環がある。その結び目が巡礼地となる。そしてこの円環は常に「現在」として繰り返されます。我々はこうした永遠のサイクルの中の「今」をも生きているのではないか。

金戒光明寺の八角堂である納骨堂の内部には、外から見ることは出来ませんが、地下に落ちるらせん状の滑り台があり、そこから骨壺を滑り落とす設計になっています。

七、八角形のパラドクス

ところで、京都国立近代美術館の寄託作品に、笠原恵美子の作品《This sentence is not composed of eight words》(1991)という八角形の箱があります。壁面には、タイトルにもある八つのアルファベットからなる「この文章は8個の言葉から成立していない」を意味するフレーズが書かれています。対義語「IDEA+FACT」「HOPE+FEAR」「LOVE+HATE」「BODY+MIND」という対がそれぞれの箱の取手部分に刻まれ、内部は無限に反射する鏡像空間となっており、作家は「自分の棺桶と思って作った」と述べています。

そこから考えさせられるのは、八角形が人間の矛盾から生まれた対角線からなる不完全な形であると同時に、その内部の無限の空間は二項対立を超えた夢を象徴している、そのようなアンビバレントな「八角物語」です。

※図版キャプション：笠原恵美子《This sentence is not composed of eight words》(1991)

ここで再び八を象徴する夢殿に戻ってみましょう。夢殿の八角円堂を持つ法隆寺は、哲学者の梅原猛の説では、聖徳太子像の頭の真ん中に釘が打たれていることから、太子の怨霊を鎮魂するために造られた寺であり、夢殿はその墓であると仮説されています。真意は置くとしても、八角形の謎について触れる時、円満さを象徴する形である同時に、その対角線上からなる形であるというパラドクスを思わずにはいられません。そこには冥界と地上のねじれが内包されているかのようです。

この世とあの世は地上に重なりあい、また同化もしません。八角形はレイヤーを統合しません。昼と夜、光と影の関係にあるように、この地上でも棲みわけがあります。これは篋が冥界と地上の間を往復することにも言えるでしょう。こうして人々の夢や想像の中に、地上の異界（読み：アンダーグラウンド）がある。

ここまで述べてきたように、八角堂、三角形の三柱鳥居、角をもつ台形などの人間が作る象徴的な形態に対して、輪郭のない幻や夢、点のような無角形の渾沌、多様な形を持つ物の怪、篋の冥界など、見えない異界があり、八角形の中には複数の夢の領土がありました。八角形という円満な形は人々の理念であり、実在しない破線に過ぎません。いわば、お化けのような存在です。実際は八角形の内側にそうした様々な形の夢がバラバラに隣り合っている。当然、そこには怨霊や呪いがあり、円満にならずにそれぞれの角が立っているとも言えるでしょう。

回帰的な時制も含めると円環のようなもの、螺旋のようなものまで見えてきました。だから八角形とは、夢殿のような理想的な輪郭を持たない「夢」そのもの、煙のようなものなのです。

八、巡礼エクササイズ

ところで、中国の「西遊記」や「南総里見八犬伝」などの影響を受けている鳥山明の「ドラゴンボール」では、7つのボールを集めると最後に願い事を叶えてくれる神龍（読み：シェンロン）が現れます。このボールは「八犬伝」の数珠から来ており、もともとは「八」でした。そのボールを集めるところに物語が発生します。しかし、悟空はボールを集めて願いを叶えることが目的ではなく、この世界を宝島として探検すること自体に意味がありました。このことは「神話は物事を説明するのではなく、「基礎付ける」ために存在する」（ケレーニィ）ということです。八角巡礼も同様、様々な物語や巡礼地をめぐること自体に意味があり、それぞれが描く形の軌跡をたどることではあきません。そのような神話が宝島（この世）を探検する物語を基礎づけている。八角巡礼は、巡礼をエクササイズ（修行）として捉え、夢の実現の過程が重要であると考えます。

巡礼地 8

前方後円墳の「蛇塚古墳」は、日常の民家の中に突如として現れる巨石で、後円部中央の石室に当たる部分だけ残っています。広大な古墳の面積は地下世界に埋まり、文字通り地上を基礎付けています。

※図版キャプション：「蛇塚古墳」地図、「蛇塚古墳・石室図」

篋が地下水脈を行き来したように、探検や巡礼することが一つの修行（エクササイズ）になる。ドラゴンボールでは願い事がかなった後にすぐにボールが四方八方へ散らばり、また次の探検が始まります。神龍は夢を叶えると、分散してこの世にバラバラに弾けます。

八角巡礼も常に異質な夢の領土を経巡ること自体に意味があるのです。

<参考文献>

『古事記』(倉野憲司校注、岩波書店、一九六三年)

『日本書紀』(坂本太郎、家永三郎、井上光貞、大野晋校注、岩波書店、一九九四年)

『莊子』(金谷治訳、岩波書店、一九七五年)

『日本霊異記・今昔物語・宇治拾遺物語・発心集』(池澤夏樹=個人編集、伊藤比呂美他訳、河出書房新社、二〇一五年)

磯崎新『建築における「日本的なもの」』(新潮社、二〇〇三年)

松岡正剛『日本文化の核心』(講談社現代新書、二〇二〇年)

丘眞奈美「「閻魔大王の冥官」と呼ばれた稀代の文人官僚・小野篁卿」(「平安京異能人物伝」医療情報誌『シュネラー』、ファルコホールディングス、二〇一七年)

河合隼雄『中空構造日本の深層』(中央公論新社、一九九九年)

「彫刻とジェンダー、美大の状況。アーティスト・笠原恵実子インタビュー シリーズ：ジェンダーフリーは可能か？(6)」(ウェブ版 美術手帖

<https://bijutsutecho.com/magazine/series/s21/20148>)

梅原猛『隠された十字架—法隆寺論』(新潮文庫、一九八一年)

<制作>

テキスト=大崎晴地

組版設計=見増勇介 (ym design)

映像編集=片山達貴

音楽=灰街令

調査協力=菊地暁

企画・制作=京都国立近代美術館

©CONNECT⇔ 芸術・身体・デザインをひらく 2020 / Haruchi Osaki 無断転載厳禁